

行基仏について－『芸術新潮』1991年1月号

92K090 齊藤武志

序

従来、仏像というものは芸術的価値、あるいは歴史的価値の方向から見られており、仏像の背後にある造った人の意図というものは、ほとんど考えられることがなかったようである。そのため芸術的価値、歴史的価値のない異端の仏像は無視され続けていた。しかし異端のものにはそうする理由があったはずであり、その理由が分かれば今までは価値が無かったものが価値を持つようになるということは十分に考えられる。

1991年1月号の『芸術新潮』は、そのような視点から、従来とりあげられることがほとんど無かった行基仏と呼ばれる仏像を扱っている。

このレポートでは、それらの仏像について井上正、梅原猛の説をもとに日本的仏教の萌芽という点から考えてみたい。1節では行基という人間について簡単に記し、2節では行基仏と呼ばれる仏像について精神的な意味を考える。さらに3節では日本的仏教について考えてみたい。

1、行基について

密教学者の金岡秀友氏によれば、日本の古寺、名刹とたたえられる寺々670ヶ寺の開祖に帰せられる高僧の中で、鎌倉仏教の代表者（法然、親鸞、道元、日蓮）は、ほとんど無く、中心となるのは奈良仏教の行基と平安仏教の空海であるようだ。⁽¹⁾

もちろん、これらの数字は疑わしいものであるが、この数字が「開祖として誰を仰ぎたいか」という「思想史的事実」を示しているということは、金岡氏も述べている。金岡氏はこの後、空海について述べておられるが、私はもう1人の主役、行基に注目したい。

行基は668年、河内国大鳥郡に百済系渡来人の子として生まれた。15歳で出家し薬師寺に入ったが、後に民間で仏教を説くようになる。行基は他の著名な僧とは違って、宗派を開いたわけではない。彼自身の手による著作は無く、彼の行動が分かるのは『続日本記』、『日本霊異記』などである。

行基が歴史上に現れるのは、「僧尼令」に反した行基集団の布教と福祉活動、あるいは743年の東大寺大仏の造営への協力などであり、行基の思想が語られることは少ない。

しかし、行基が強いカリスマを持っていたことは行基菩薩と呼ばれていたことから分かるだろう。奈良大学の井上正教授はその理由として、外来思想であった仏教を行基が日本古来の文化と融合させた（仏教思想の日本化）ことをあげている。⁽²⁾ そして井上氏は、その根拠として「行基仏」と呼ばれ各地に点在する異端の木彫り仏を示している。

2、「行基仏」について

行基仏は行基、あるいは行基集団が造ったとされる仏像である。これらの仏像は官寺、例えば東大寺、薬師寺などの仏像とは大きく異なっている。歪んでいる、バランスが悪い、未完成

のように見えるなど、少くとも芸術的ではない。これらの仏像は平安時代9、10世紀の地方仏師の作品とされており、これまで注目されることはほとんどなかった。

しかし前述したように異端のものにはそれなりの理由があるはずである。いくら地方仏師と言えども1メートルほどの像を誤って曲げて造ってしまうということが考えられるだろうか。井上氏はそのような疑問を持ちこれには芸術的価値を捨ててまでするような、思想的な理由があったのではないだろうか、と考える。

何はともあれ図を見れば、これらの像が正統な仏像と明らかに異なっていることが分かるだろう。図1は和歌山県薬王寺の千手観音菩薩立像である。像が左のほうに傾いていることが分かるだろう。わずか1メートルほどの像を気付かず曲げてしまうことは考えられるだろうか。

図2は兵庫県達身寺の観音菩薩立像である。まるで妊娠しているかのように腹が膨んでいるのが分かるだろうか。この腹の膨みは何を意味しているのだろうか。

図3は大阪府太平寺の阿弥陀如来座像である。この仏像には目がない。他の部分は完全に仕上がっているのに目だけが彫られていないのである。目が彫られていない仏像は他の行基仏にもあるが、仏にとって目は一番重要であるはずなのに、なぜそれを彫らなかったのだろうか。

これらの異端の仏像に対する疑問に対して、井上氏は「霊木化現仏」説で解決しようとしている。この説はしっかりしたものであり、十分に納得がいくものである。国際日本文化研究センター所長の梅原猛氏もこの説に賛同している。

霊木化現仏とは「霊木に仏が出現しようとした尊像彫刻」⁽⁹⁾である。霊木とは神木とも呼ばれる古木のことである。山などにいくと大きな木にしめ縄が張られ、集落の守り神となっているものがあるが、あれが霊木である。

梅原氏によれば日本に神社が出来る前は「山そのものが神であり、森そのものが神」⁽⁴⁾であった。ならば、その神なる森の中でも特に存在感がある霊木に神が宿っていると思われても不思議ではない。そして、仏も霊力を持った神と考えられていたであろう日本では、霊木に仏が宿っているという考え方が出てきても、おかしくはないのである。その霊木に宿った仏を具現させた（霊木から仏像を彫った）ものが霊木化現仏である。この考え方でいくと、先に紹介した異端の仏像が説明できる。

曲がった仏像の素材が、もともと曲がった霊木であったとすれば、その霊木の持つ力を損なわないように霊木の歪みに合わせて彫るのが自然だろう。また島根県万福寺の観音菩薩立像には木の節が残されているが、これは普通の仏像では考えられないことである。なぜなら木の節は彫りにくく、無理に刃を立てれば刃こぼれをおこすからである。しかし、この素材を霊木と考えるならば、節は幹から枝が伸びていた痕跡で、かつての生命の証しであり、尊く残しておくべきものなのである。

腹の膨らんだ仏像は霊木の持つ生命力と妊婦の持つ生命を生み出す力を重ね合わせたものと考えるのが妥当である。

しかし何と言っても注目すべきは目のない仏像である。開眼という言葉が示すように仏像にとって目は最も重要であり、彫り忘れたということは考えられない。何か意味があるはずだ。それを考える前に図4を見てほしい。兵庫県達身寺の薬師如来座像であるが、この像の後ろは彫られていない。これまで、このような仏像は手抜きの失敗作とされてきた。しかし、この仏像は耳の後ろに節があることから分かるように霊木である。それを考慮に入れると、この彫り残しは意図的なものと考えられる。すなわち、この仏像は霊木から仏像が生まれる瞬間、完

全には仏像にはなっておらず、まだ部分的に霊木である状態を表現しようとしたものと考えられる。

目のない仏像もこの考え方で十分に説明がつく。既に霊木はほとんど仏像となり、残るは目が開くばかりの状態となった表現と考えられるからだ。

これまで異端とされてきた行基仏は「霊木化現仏」というアプローチにより、その意味が明らかになってきた。そして、この行基仏の中に日本的仏教の姿を私は見る。それを次の節で考えて結論としたい。

3、日本的仏教とは

梅原猛氏は日本の文化を森の文化としている。森の文化とは樹木崇拜文化であり、行基が民衆に人気があったのも、日本の民衆の基層に存在する森の文化の伝統である木の崇拜を仏教に取り入れたからではないかとしている。⁶⁾

おそらく日本的仏教はこの森の文化、というより木の文化から生まれたものではないだろうか。木、とりわけ古木はしっかりと大地に根を下ろしている。我々はそれを霊木と言う。それは確かに木に対する尊敬でもあるが、同時に霊木を支える大地への尊敬でもある。日本文化はこの「大地への尊敬」を土台にしているのではないだろうか。

霊木という日本古来の伝統的思想と仏教とをうまく組み合わせた行基は大衆に受け入れられた。ここにきて、初めて仏教は日本のものとなった。果たして行基が「木とそれを支える大地への尊敬」ということを考えていたかは分からない。井上正氏の言われるように自分の宗教的体験から生まれたのかもしれない。⁶⁾ しかし、行基、あるいは行基集団によって日本的仏教が萌芽したということは確かであろう。そして、それを明確に表わしているのが行基仏なのである。

註

(1) 金岡秀友『日本の神秘思想』、199ページ。

(2) 井上正、「霊木化現仏への道」。

(3) 前掲論文。

(4) 梅原猛、「私を導いた謎の仏像」。

(5) 前掲論文。

(6) 井上正、前掲論文。

<参考文献>

梅原猛、「私を導いた謎の仏像」、『芸術新潮』、1991年1月号。

井上正、「霊木化現仏への道」、『芸術新潮』、1991年1月号。

金岡秀友、『日本の神秘思想』、講談社、1993年。



(图1) 千手观音菩薩立像 和歌山県・薬王寺



(图2) 観音菩薩立像 兵庫県・達身寺



(图4) 薬師如来坐像 兵庫県・達身寺



(图3) 阿弥陀如来坐像 大阪府・太平洋寺